日本聖書神学校 学報
Japan Biblical Theological Seminary
〒 161-0033 東京都新宿区下落合 3-14-16・☎ 03-3951-1101 ～ 2・Email: jbts@jbts.ac.jp

2022 年 12 月 15 日
第 171 号
発行人　神 保　望
【後援会献金口座】
郵便振替：
00110-3-6435
加入者名：
学校法人聖経学園
日本聖書神学校

【巻頭言】

新しい天と地

教　授　菅原裕治

今号の内容

巻頭言　1
全校修養会−内面化した差別を自覚する　2
全校修養会報告　3
理事・監事・評議員改選　3
卒業生研修会報告　4

今年、アドベント期間に洗礼予定の方から、教名について相談があり、「平和」をキーワードにする名前が希望ですと告げられました。「エレーナ」となりましたが、「イレーナ、イリア」（ヘレナは別系統）などの名前が、ギリシア語の「平和」が語源だったと改めて学びました。

「イザヤ書」は、「平和」に関する個所がある文書の一つですが、その末尾に 65 章で、「見よ、私は新しい天と新しい地を創造する。先にあったことが思い出されることはなく心に上ることもない」（イザヤ 65：17）と述べます。ここにある「創造」という言葉は、『聖書（旧約）』において、主なる神様にのみ用いられています。「新しい」とは、内容的な新しさを意味します。それゆえ、「新しい創造」とは、すべてが変わるような新しい秩序を意味すると考えられます。

さらに「しかし、私が創造するものを、代々とこしえに楽しみ、喜べ。私はエルサレムを創造して喜びとしその民を楽しみとする」（イザヤ 65：18）と続き、「創造」という言葉が三度繰り返されます。そして、65 章 19 節～ 25 節では新しい秩序の内容が示されています。そこに描かれている内容は、主なる神様が創造されたものすべてにとって、本当の喜びです。「主なる神様と人、人と人、人と自然」の関係が回復した、真の「平和」が実現した光景であるからです。

ここに記されている、「平和」は、今日のわたしたちにとっても遠い存在です。しかし、『聖書（旧約）』の世界の人々は、戦いと混乱が続く歴史の流れの中で、この「平和」を切に望んでいました。それ故、わたしたちも、主なる神様が何を求めているかを、今日も『聖書』から学ばなくてはなりません。その意味でも、神学校の学びはもちろんのこと、卒業後に赴任した教会や職場で学び続けることが大切です。

21 世紀が始まり、すでに 5 分の 1 が過ぎました。20 世紀生まれの人間にとって、理想的な未来に思えていた 21 世紀も、戦いと混乱が続きます。それゆえに、「平和」を求め続けることは、21 世紀においても大切です。しかし、この「平和」は、価値観によって意味が変わることを忘れてはいけません。

わたしたちの国の憲法の「前文」には、「平和」という言葉はあります。しかし、「正義」という言葉はありません（第 9 条にはあります）。それゆえ、「正義のない平和」は存在しないのであるから、「正義」と「平和」の両方を求めることが大切といわれることがあります。しかし、「正義」という言葉にも、絶対基準がありません。そして、今起こっている戦いも、完全な「正義」と完全な「悪」との戦いであるとは言い切れないのです。

「イザヤ書」は、最後で「これらはすべて私の手が造ったものこれらはすべて私のものである――主の仰せ。私が目を注ぐのは、苦しむ人、霊の打ち砕かれた人私の言葉におののく人」（イザヤ 66：1 ～ 2）と述べます。この章が、「イザヤ書」全体のまとめとは言えませんが、最後に主なる神様が求め喜ぶ人間の姿が示されています。「正義」も「平和」も大切であり、いつの時代も誰もが求めるべき事柄です。しかし、もっとも大切な事柄は、「苦しみながらも、霊が打ち砕かれながらも、主なる神様のみ言葉を求める」人です。

この「イザヤ書」が示した「正義」と「平和」のしるし、主なる神様が求める人、それは主イエス・キリストを通して実現しました。わたしたちはこの方を信じて、教会に集められたのです。それゆえに、わたしたちはそのことを信仰や学びにおいて、認識し続けることが大切です。そこから具体的な歩みが始まります。

今年もイエス様のご誕生を世界中で祝います。それは人間としてのイエス様の誕生を祝うことであり、イエス様が示すまことの平和と希望の誕生を祝うことであり、またその完成をもたらしてくださるイエス様の来臨を待ち望むことです。世界がまことの平和に少しでも近づくために、主のご降誕を心から祝いたいと思います。

全校修養会－内面化した差別を自覚する

校 長　神保 望

無意識のバイアスについて著したジェニファー・エバーハートによると、バイアスとは「偏りを生じさせるもの」です。原意は「斜め」ですから、斜めに見るという意味で「傾向、先入観、偏見」と訳されます。エバーハートの研究によると、自分と共通点のない人々（外集団）に対する否定的な情報ほど脳によって即座に処理されます。そこで「迅速性と曖昧さがバイアスの最も強力な引き金になる」と分析しました。主観的な基準で迅速な意思決定を迫られる時、誰もが先入観をもって見る可能性があります。また脳には物事をカテゴリー化し効率的に処理する機能がありますが、バイアスはカテゴリー化によっても生じます。他者をカテゴリーに押し込み、ステレオタイプ的に判断することでバイアスが生じることからカテゴリー化はバイアスの前兆でもあります。偏見をステレオタイプと表現したのはウォルター・リップマンですが、「我々は見てから定義しないで定義してから見る」と語りました。他者を斜めに見る現実がある中で反差別スローガンを掲げるだけでは、差別が解消されることはないのです。

スローガン化の問題は、宣教学者のデイヴィッド・ボッシュも指摘しました。15 世紀の大航海時代に始まった植民地政策では多くの宣教師たちが派遣されましたが、「大宣教命令」（マタイ 28：18 ～ 20）をスローガン化したことによって宗主国の武力侵攻の実態を曖昧化させたと言えます。また 19 世紀以降の宣教の動機は「共感と連帯」(コリント二 5:14 ～ 15)ですが、実態は「同情と憐れみ」でした。「全ての人は神の愛の対象であるが故に救われる価値がある」と謳われた時代、数千人もの宣教師がアジア・アフリカに派遣されましたが、「恵まれない人々に提供すべきものがある」としたため、「人々は、それを受け止めたいと望んでいる」と思い込んだのです。そこで宣教師たちが取り上げたのが「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」（使徒言行録 16：9）の箇所だったのは、スローガン化によってバイアスが生じたことを裏付けています。バイアスによって、外的要因としての差別のみならず内面化した差別に気づかなかったことが問題です。李仁夏によると、隣人愛は「まず自分を確認すること」から始まります。それは「隣人を自分のように愛しなさい」（マルコ 12：31）と同様、相関関係により理解されます。そこでは他者の痛みは他人事ではなく自分の痛みでもあり、不当と思うことを他者にした時点で自分自身も痛むものなのです。

主イエス・キリストは「善いサマリア人のたとえ」の中で、「誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問われました。トラブルを避けた人々には、律法に精通した信仰的熱心さがありました。異邦人との接触を制限され、傷つき出血した者への接触を禁じられた彼らが取った行動が律法の一部に適っていただけに、これは内面化した微かな偏見や差別（マイクロアグレッション）の典型例と言えます。宗教的指導者たちは偏見なくあろうとしながらも、無自覚に差別していることに気づかなかったのです。

他方、諸外国の侵攻によってユダヤ人と異邦人の共生が進んだサマリア出身の旅人は、律法解釈により差別や偏見に晒されたこともあり、傷ついた旅人の痛みを自らのものとして受け止めたことで介抱し命を救っています。そして主イエスは、隣人愛に基づき介抱したサマリア人を取り上げ律法の真意を教えられました。ハロルド・ユーカーによると、内面化された微かな偏見や差別のメカニズムを理解したいなら、「その人に関心を向けるべきである」と教えています。主イエスも人に関心を向けられましたが、たとえば「重い皮膚病を患っている人をいやす」（マルコ 1：40 ～ 45）の内容を取り上げ、「同情と憐れみ」について教えられました。しかしそれは、植民地政策時のスローガン化により生じたバイアスやステレオタイプとは全く異なります。

「憐れみ」（スプランクノン）の原意は、「内蔵（心臓、肺臓、肝臓、腎臓）」です。古代人が内蔵を「感情の座」と見做したのに由来します。そこに同情や憐れみを感じる心があるとしたのでしょう。ですから主イエスが教えられた憐れみとは、他者の苦難が自分の経験として受け止められるのであり、他者の経験を自分の痛みとして感じることでもあるのです。主イエスは「金持ちの議員」（ルカ 18：18 ～ 30）の箇所において、貧しい者と富める者が出会うことで生じる新しい関係を示されました。貧しい者、富める者には各人固有の使命があり、金持ちの議員には「貧しい者に分ける」役割が与えられました。しかしそれは富める者が貧しい者に成り代るであるとか、「助け手」に終始するというのではありません。主イエスは隣人のために何かになる（become）よりも、隣人と共にいること（be）を教えられました。隣人の痛みを分かち合う者として共にいる、そのようにして現場に立ち続けるのは難しいことではありますが、全てのキリスト者にとって大切な生き方が示されているのではないでしょうか。

福音の内実たる神の救済は、全人類を対象としています。ですから主イエスはガリラヤでの宣教活動の初めに、「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1：15）と宣告されました。悔い改め（メタノイア）とは、自らの生きる方向を神に向き直らされることであり、私たちは内面化した差別を福音によって自覚し新しい関係を構築する生き方へと聖霊により導かれています。

全校修養会報告

2022 年 10 月 28（金）、29 日（土）と神学校全校修養会が開催されました。今年度の学術部長という立場にて、この修養会について述べさせて頂くことになりました。

今年度は「自分の中の偏見・差別を克服するために」という、とても大切なテーマが掲げられました。初日は神保望校長による基調講演が行われ、2 日目は「マイクロアグレッション」「教会あるある」（教会でおこっているハラスメント）の具体的テーマについて、3 つのグループにわかれてのワークショップをしました。この修養会については、教務部の柳下先生と教授会から小林先生、そして、学術部から加太さんと私の 4 人で、この 4 月から準備を進めてきました。

「ハラスメント」については聞きなれている言葉で、自分なりには理解しているつもりですが、「マイクロアグレッション」については、この修養会を準備する中で初めて耳にする言葉でした。「マイクロアグレッション」とは別名「小さな攻撃性」で、人と関わるときに相手を差別したり、意図はなくても相手の心にちょっとした影をお

とすような言動や行動をしてしまうことです。今回のテーマは身が引き締まる内容であるものの、しかし、自分がこれまで深く認識してこなかった内容でもあります。実際にまわりではどのようなことが問題となっているのか意識が薄い現状から、今後、牧師となっていく上で意識できていく必要性がある、そんな気づきが与えられる良い機会となりました。グループのワークショップでは、マイクロアグレッションやハラスメントについて、常にアンテナを張る、個々で勉強し続ける、この修養会のような場でのディスカッションを継続するといった意見や、また、教会においてはハラスメントがないと思っているので、教区の他にもたくさんの相談できる場をつくる必要がある、教会において「ハラスメント」に関する説明書や規定書といったものをつくり、常に皆が気を付けるといった意見が出てきました。

今回の修養会を通じて、改めてこれまでの自分の考え方を修正していく必要があると思いました。まさに「自分の中の偏見・差別を克服する」ことなのですが、人を愛するとはどういうことなのか、人に対する優しさとは一体どういうことなのか、そして、人をゆるすと言ったことがどういうことなのか、そのようなこれまで自分が積み上げてきた考えを修正していかなければ、到底、今後も誤った対応の仕方を続けてしまうことになると思いました。私のワークショップで出てきた「これからもずっと学び続けなければならない」という意見は大変インパクトのある言葉で、本当にその通りと思った次第です。

（2 年　堀尾 隆）

理事・監事・評議員改選

2022 年 11 月をもって理事・監事・評議員の任期が満了となり、10 月の理事会・11 月の評議員会で新理事・新監事・新評議員を選任いたしました。なお、11 月の新理事会において吉岡光人理事が理事長に再任されました。

2019 年 11 月から理事、監事、評議員としてご奉仕下さり、退任された皆様は下記の方々です。感謝し、御礼申し上げます。

監事　今野善郎

評議員　松橋秀之　溝口周二　渡辺知子

2022 年 11 月から理事、監事、評議員として任期 3 年をご奉仕くださる皆様は下記の方々です。

理事　吉岡光人（理事長）　荒瀬牧彦　小河由美子　菊池公平　神保 望　鈴木 淳　髙橋信夫　田村 博　村上信男　柳下明子　吉岡喜人　吉田博

監事　松橋秀之　丸山和則

評議員　荒瀬牧彦　飯田輝明　井口 真　石井素子　大久保正禎　小河由美子　金子 茂　菊池丈博　栗原 清　佐藤慎一　島崎草子　陣内大蔵　神保 望　菅原裕治　高倉信行　田村 博　佃 雅之　中野通彦　中村公一　本多広高　松脇達朗　水口 洋　三宅宣幸　柳下明子　吉岡喜人

（松脇達朗総務部長）

キリスト教研究所紀要『聖書と神学』投稿募集

『聖書と神学』第 34 号は、2023 年 10 月末に発行予定です。今回「特集」は組みません。査読を経て掲載する a. 論文、b. 研究ノート、c. 書評、および、査読のない宣教報告・神学黙想の投稿をお待ちします。締切は 5 月 20 日。投稿要領を institute@jbts.ac.jp までご請求ください。

投稿資格を有するのは当研究所の所員・会員です。卒業生はどなたも会員となれます。卒業生でない方は会員 2 名の推薦を得て入会となります。神学校総務部にお申込みください。年会費千円。会員には紀要 1 部を送付。　（所長　荒瀬牧彦）

卒業生研修会報告

二度にわたって延期を余儀なくされた北九州での卒業生研修会開催を、今年は遂に実行できました。「地域に根ざす教会」という主題を掲げた二泊三日の充実した会となりました。オンラインの 17 名を含めると計 45 名の参加。一日目と三日目はホテルの定員百名の会議室を利用し、余裕のある空間で安心して過ごせたことを感謝します。

開会礼拝では、同窓会九州支部長の樋口洋一牧師（島原教会）がルカ５章より「もう一そうの船」という説教をされ、宣教に遣わされることの厳しさと光栄を示されました。続く主題講演１は、南小倉バプテスト教会の谷本仰牧師による「みんなのつくえからみえてきたもの」という実践的な教会論。谷本氏はバイオリニストであり、ホームレス支援の NPO 法人「抱樸」副理事長としても東奔西走するユニークな牧師です。この講演にもバイオリン演奏を織り込んで我々を喜ばせてくれました。「みんなのつくえ」は、２年前の春、教会に大量のパンが寄付されてきたことから始まりました。教会前に机を出して「ご自由にお持ち帰りください」と貼り紙したらパンはなくなりましたが、代わりに筍や玉ねぎなど次々と持ち寄る人が現われ、「どうぞ」と分け合う場となり、新聞やテレビにも取り上げられました。そこで経験したことを谷本氏は、「＜私の教会＞から＜渡しの教会＞へ」と語ります。教会の発想が変えられる時、新しいことが見え、新たなつながりが生まれて

る！小さな教会で起きる愉快な出来事の数々を通して、希望を感じさせてくれる講演でした。

主題講演２は、犬養光博氏（元福吉伝道所牧師）による「筑豊でイエスと出会う　その２」。今回は、著書『筑豊に出合い、イエスと出会う』に寄せられた書評について、ハンセン病療養所やあるご夫妻との出会い、そして放蕩息子の譬えから教えられる教会の姿勢を話されました。私には特に、「教会は欠如体であることを大切にすべきだ」という言葉が印象に残りました。欠けを持つ共同体であることを自覚し、そこにこそキリストの力が働くことを知りたいと思います。

二日目は、筑豊でのフィールドスタディです。バスに乗り込んだ一行は、先ず宮若市の山中にある「復権の塔」に向かいました。これは戦時中に朝鮮半島から炭鉱労働に強制徴用された多くの人が命を落とした地、閉山後にも失業や精神疾患で多くの人が苦しんできたこの地で、「人間としての権利を与えられないまま死んでいき、忘れられようとしている犠牲者の権利回復を宣言する塔を建てよう」と志した宮田教会の服部団次郎牧師が中心となって、12 年に及ぶ苦労の末に建立されたものです。慰霊塔ではない。無念を味わった人々の尊厳の復権を宣言し、今絶望している人々の自尊心と自主性

の回復を後押しする塔である、と聞きました。刻まれた「すべての国の働く人々は／世界の仲間である／かつては断絶や抑圧もあったが／このごには連帯と尊厳があるように」という言葉が心に響きました。

続いて一行は飯塚霊園国際交流広場にある無窮華（ムグンファ）堂を訪れました。朝鮮半島出身の炭鉱労働者の方々の遺骨が納められている追悼施設です。堂を囲む白い壁は「歴史回廊」と名付けられ、「日朝関係史」年表が記されていました。その後バスは田川の石炭資料館に向かい、資料館見学の後、裏手の丘の上に立つ韓国人徴用犠牲者慰霊碑へと上りました。フィールドスタディのしめくくりは、添田町の日向墓地という、かつてのボタ山に設けられた小さな墓地でした。1974 年に朝鮮人強制連行の真相調査団が入った時、元労働者の方の証言で転々と置かれた墓標がわりの石の下に遺骨が埋められているとわかったのでした。その方は、墓碑銘のある幾つかの碑を指し「日本人の犬と猫の墓です。地下にはまだ同胞がねむっているのです」と地団駄を踏んだそうです。私たちは輪になって、犬養先生の導きで祈りをささげました。忘れ去られた人々の眠る丘。そこで「忘れない」と誓い、祈り続けるという営みの尊さを知りました。

今回現地の牧師としてご奉仕くださった若松教会の茶屋明郎先生、事前視察を行って綿密な準備をされた同窓会役員の中野牧師・朴牧師と小河同窓会長、動画作成等にご尽力くださった方々に心から感謝します。なお、講演の音声・動画、フィールドワーク先の案内動画が神学校 HP の同窓会ページにありますのでぜひご視聴ください。

（荒瀬牧彦）